

獨歩の『牛肉と馬鈴薯』

—特に「驚異」について—

芦谷信和

『牛肉と馬鈴薯』が国木田獨歩の代表作の一つであることは、すでに定評となっている。そうしてその主題たる

「驚異」の思想についても、先学によってしばしば述べられているところである。しかしながらそこにはなお作品研究にさいして論及すべき余地があると思う。

今、「驚異」の本質究明を中心として、これらの諸説を整理し、さらに細微にわたって分析を試みると共に、その価値に論及して、私見を述べてみたい。

二

『牛肉と馬鈴薯』の提起する議論が、牛肉か、馬鈴薯か、という対人態度の問題であり、この作品の題名がこゝに由来するものであることは、容易に理解せられる。この理

想を追うか、現実を追求するかとの議論に、岡本誠夫を除く諸人物は、いづれも現実主義への賛意を表明している。本節ではこの問題を獨歩内部の浪漫と現実という面から探り上げてみよう。

獨歩の内部には早くから浪漫的な一面と現実的な一面とが共存していた。彼の内部にはすでにこの相対的な両面の素質が用意されていたのである。だからこそ彼の経歴には、これらがこもこも頭を擡げてくることとなる。

獨歩の浪漫の表出はまづ信仰と文学とに見られる。彼がはじめてキリスト教に接したのは、明治二十二年冬頃、友人に連れられて麴町一番町の教会へ行った時である。同二十四年一月四日同教会で受洗し、キリスト教青年会の幹事となつて、神の道を求めた。その後の信仰の経移については、『欺かざるの記』(二十六年二月四日—三十年五月十八日)

をはじめ、書簡・諸作品によつて明らかのように、宗教観に後述のごとき屈折を示してはいるが、結局彼はクリスチヤンとして死に臨んだ。四十一年五月十九日植村牧師は独歩を茅ヶ崎南湖院の死の病床に見舞ひ、最後の訓戒を与えたのである。キリスト教は日清戦争前後のわが国浪漫主義文学にとつて精神的背景をなすと共に、「新しく自我に目醒めかけた青春の詩心に、エキゾチックな香りをよびます芸術的な雰囲気」を提供していたのである。(このことは透谷において最も明らかである。) 独歩はまた、予言者的風格をもつて時局を論じ、実利主義を難じて「カントやフィヒテの理想主義に共鳴した」カールライルや、「自然のために」「自然の美と人間の神秘的な結びつきを歌った」ワーズワースを愛読して、彼の文芸精神に血肉化したのである。信仰と文学は独歩の浪漫精神の表出であつた。

『牛肉と馬鈴薯』には岡本と上村の青年時代における北海道熱を彼等の理想主義を示す事実として述べている。これは独歩「自身の実歴で、空知川の岸辺は此実歴の实证であり、上村の言葉にはその反映がうかがわれる。岡本がその愛する少女と北海道の生活を空想して、語り合うのが「何よりの楽」しみであり、その想像のアメリカ風の家から「澄んだ声で歌ふ女の唱歌を響かしたかった」と述べているのは、独歩が信子と北海道に愛の巢を営もうとした事実

に基づくものである。信子は「唱歌をよくし——」唱歌の達人」であつた。

以上のごとき一面の経歴は彼の浪漫的性情を示している。他面、彼が常に現実的生活の渦中に身を置いていた事實は、その現実的な性格を実証する。彼は青年期及び壮年期の大半を新聞記者として過ごした。特に徳富蘇峰の国民新聞社からは、日清戦争従軍記者として千代田に乗艦して、『愛弟通信』を紙上に送つてゐる。また二十六年金森通倫の自由新聞入社のかげには政界進出への意図がうかがわれ、三十四年には星亨の民声新聞社編輯長の地位から代議士たらんとして、母の郷里銚子地方に運動したが、議会が開散を免れたため、彼の希望は挫折を余儀なくされた。記者生活、砲煙弾雨の下をくぐつての報道、政界進出の準備——

独歩はキリスト教や文学に浪漫的性情を示す反面、常に現実的な仕事にもとり組んだのである。彼はまたしばしば事業に没頭した。二十七年には佐伯で印刷事業を計画しており、三十五年には矢野龍溪の徳憑を受けて、近事画報社に入り、社が衰運に向かうも、なお事業を放棄するに忍びず、すでに文壇的地位の確定した身でありながら、病をおして三十九年には独歩社を起し、これが彼の命を縮める「災禍をなしたと言つて好かつた」。こうした彼の経歴に見られる事業慾・政治慾は——このことは再び後述するが

——いづれも建設的な理想によつて裏付けられているのである。しかしながら彼の内面における「浪漫と現実の相剋」という点より見れば、やはり現実主義的な一面として考えねばならないであろう。

以上のごとく独歩の経歴は彼の浪漫的性情と現実的な性格の交錯を明らかにしている。

彼の内部における浪漫的一面と現実的一面との葛藤を最も明確に表白してみせたものが『欺かざるの記』である。

心に平和なし、徒らに自から苦しむ。

曰く吾れ何を為す可きやと。之れ古るきく疑問なり。幾度か決して已に幾度か打破りたるものなり。

曰く吾れ全然美文を草する人、物語りを造る人、人情を説く人、自然を歌ふ人たる可きか。詩人たる可きか、一言以て言へば「文字の人」Men of Letter たる可きか。

曰く吾れ實際の政治界に縦横奔走して今日の吾国を政治的方面より救ふ可きか。

曰く断然、伝導師たる可きか。

(以下省略)

「實際家たるべきか、予言者たる可きか」は常に独歩の煩悶であつた。

おおよそ、浪漫とは時空の關係において現実を遠去かるにすぎない概念なのである。しかも独歩の場合、それらは

いわば「天職」選択上の態度という同一直線上の左右に位置する。彼の浪漫は決して現実と遊離したものではなかつたから、浪漫に徹しようとするほど、対立する現実への魅力が増大するのである。こうして浪漫と現実とはその対決を迫られる。「浪漫と現実の相剋」はまづ「天職」の選択をめぐつて、彼の内部で敢行されることとなるのである。そうして彼の浪漫が現実に基盤を有するものである限り、この相剋は宿命的な様相を帯びてくる。

しかも浪漫はこの相剋の中で徐々に後退しなければならなかつた。「理想は喰べられませぬものを！」と言つた上村の言葉は自棄的な響さえ伝えてゐる。彼は青年時代には熱心なクリスチャン、すなわち熱烈な馬鈴薯党で、先述したごとく、色々な空想を描いて「北海道自由の天地に投」ずることを思い立ち、実行に着手したのであるが、現実意外に敵しく、間もなく牛肉党に変節した。上村の理想主義は現実主義の魅惑の前に敗北を喫し、彼は浪漫を放棄してしまつたのである。独歩の場合には、浪漫は最後まで喪失されなかつたものの、彼は伝導師たることをあきらめ、後年には一時文学をも離れて、出版事業に力を注ぐこととなつた。斯様な浪漫の後退を余儀なくさせたものは、一つには自己内面における現実的性格との葛藤ではあつたけれども、他面またこれから述べようとするがごとき外部の社

会的現實に對する戦いと、それが結果した敗北の『疲労』にも依因するところがあつたのである。

さて、ここで考えねばならぬことは、現實主義的な一面といえども、それは単に実利ばかりを追求するといったようなものではなかつたことである。先掲の『欺かざるの記』にも明らかなごとく、政界への進出意図も、国家を「政治的方面より救」済しようという高潔な理想の上に萌芽したものであつた。彼はまた事業熱に捉われていた時にも、常にその理想を高く掲げ、仕事に情熱を傾けた。後年近事画報社がめざましい發展を遂げて後、社長矢野龍溪は

「私が最もよく国木田君を知つて居るのは、近事画報時代で、一切の編輯は任せきりであつたから部員を雇ふにも出すにも、何事によらず万事依頼して置いたが、事務の遣り方を見ると、大雑束なるべき性質と反對に頗る緻密で、表紙の意匠でも説明でも細かに処まで行届いて、例へ一枚の挿画でも經濟的に仕上げる工合などは確に性格の一面を發揮してゐたと思ふ」

と語つた。独歩の性格の一面を示す言である。と同時に彼がいかにほど仕事に情熱を傾注していたかがうかがえる。斎藤牛花も

独歩は決して心から粗放無責任な男ではなかつた。むしろ物が一寸歪んでゐても氣にするといふ潔癖だつた。仕事に對する神經

的で、そして又目から鼻へつきぬける才人肌で、何事にも鋭い觀察もし、一寸間違つたら、凄まじい見暮で詰寄る勇敢さはあるが、相手が素直に出るとすぐ同情して冷酷な性情のない淡泊さを見せた。彼は矛盾の多い人間だつた。

と述べている。情熱的で而も淡泊な独歩が躍如としてゐる。独歩は何事に対しても——たとえ彼の経歴では現實的と見なければならぬ対象にも——理想を高く持して、情熱を注いだ。まづこの点で独歩は浪漫的であつたと言ひ得る。先述したごとく、二十七年彼は佐伯で印刷事業を計画して、四月三日蘇峰に金五百金の周旋を依頼した。その返事を十日に受け取つたが、蘇峰は文面に自分にはそれ程の金策はできかねると謝絶し、「実業は空想と両立せず」と戒めてゐる。すなわち現實的な面にもかなりの空想が織り込まれていたのである。

先述したごとく、理想に裏付けられた現實主義といえども、理想家独歩にとつてはなお煩悶の対象であつたけれども、それはまだしも彼の浪漫と全く相容れないものではなかつた。けれども彼の内面にはまた全く異質の世俗的な素質のあつたことも否定できない。彼は少年の頃「功名心が猛烈」であつた。青年時代にも、ともすれば頭を擡げようとするものは、「名と利と慾とに生」きようとする世俗的慾望だつたのである。讀書でさえ時としては「功名心の變

形」²⁰とも思えた。しかしながらこの様な世俗的慾望に對して独歩は常に反省を忘れなかつた。

白状す、自白す、虚栄の妄想、僥倖の浮念は少壮者の常なる如く、吾にも亦た往々如此、之れ悉く社会生活の魔力なり、吾が思想は社会生活の爲めに動き、吾が感情は社会生活の爲めに涌く、之れを以て虚栄僥倖の妄想浮念より脱する能はず、哀い哉。

このような反省は『欺かざるの記』の随所に見られる。彼は世俗的慾望を常に唾棄すべきものとして反省し続けた。この様な世俗的慾望は浪漫とは全く異質面の存在である。

したがって彼の浪漫の露頭たる信仰や文学の世界では、全くその醜態を阻止され、その可能性をはらむ現実的な面においてさえ、先述したような高潔な理想によって、全く克伏されてゆくのである。

結局独歩はロマンティックだったのである。現実的な面といえども、浪漫的色彩を帯びており、このロマンティックな特色は晩年リアリストティックな傾向を深めてからも、終にその色彩を失いはしなかつた。

このような浪漫が社会的現実に立ち向かう時には、常に敗北を余儀なくされる。しかも理想家独歩はこのような敗北にもいささかも屈することなく、現実挑戦しようとする。かく理想を現実に向かつて押し進めようとする限り、その相剋は避け難いものとなる。ここに浪漫と社会的現実

との相剋が見られる。印刷專業の失敗はその一例にすぎない。佐伯で石丸某から中傷の投書を受けたことが、彼の鶴谷学館を去る原因となつた。これも彼の理想の社会的現実に對する敗北であつた。この戦いと敗北とは信子との恋愛の破綻に最も明瞭に示される。独歩は二十八年六月九日佐々城信子（十八才）と相識つて、やがて恋愛に陥つた。この恋愛は信子の母豊寿の烈しい反對を押しきつた独歩の情熱によつて、十一月十一日には華燭の典を挙げるまでに運んだのである。しかしながら翌二十九年の四月十二日教会からの歸途、信子は失踪、二十五日には彼女の請いを容れて、離婚を承認せねばならなくなつた。これは明らかに彼の浪漫の社会的現実に對する敗北であつた。更に独歩社の破産から無理が災して彼の体は病魔の蝕むところとなり、社会的現實は遂に理想家独歩を仆すのである。

浪漫をもつてする現実との戦い——この戦いは彼の内部で「天職」選択をめぐる展開されるとともに、外部たる社会的現實に對しても敢行された。そうしてそのいづれの面においても彼の浪漫は敗退せねばならなかつた。この内外面にまたがる相剋の火花こそ独歩の文学なのである。

(注)

①坂本浩氏「浪漫主義思潮の展開」(河出書房版近代日本文学

講座V3) P 一一九

② 荒正人氏編「文芸事典」市民文庫P 六〇

③ 田部重治氏「ワーズワース詩集解説」岩波文庫P 二四四

④ 荒正人氏、前掲書P 二九〇

⑤ このことは独歩自身「不可思議なる大自然」改造社版国木田独歩全集V 4 P 一八五(以下全集とあるはすべて改造社版)或いは「独歩病牀録」全集V 8 P 六八に述べている。

⑥ 「予が作品と事実」全集V 4 P 二〇三

⑦ 「牛肉と馬鈴薯」——(前略)森とした林の上をバラ／＼と時雨で来る。日の光が何となく薄いやうな気持がする、話相手はなしサ、食ふものは一粒幾価と言ひさうな米を少しばかりと例の馬の鈴。寝る処は木の皮を壁に代用した掘立小屋。「空知川の岸辺」——「小屋は三間に四間を出でず、屋根も周囲の壁も大木の皮を幅広く剥ぎて組合したもので、板を用ひしは床のみ、床には藁を敷き、出入の口はこれ又樹皮を組み立てて戸となしたるが一枚被はれてゐるばかり、これ開鑿者の巢なり、家なり、いな城廓なり、」(以下省略)

⑧ 「談して居ると、突然バラバラと音がして来たので余は外に出て見ると、日は薄く光り、雲は静に流れ、寂たる深林を越えて時雨が過ぎゆくのであった。」

⑨ 「欺かざるの記」市民文庫後篇(下) P 三八、明治二十八年六月十日(以下「欺かざるの記」はすべて市民文庫)

⑩ 同右書P 七一、同年八月十二日

⑪ 同右書前篇(上) P 二七、二月十九日の記事による。

独歩の『牛肉と馬鈴薯』

⑫ 田山花袋著「近代の小説」(角川文庫) P 一一五

⑬ 坂本浩氏著「国木田独歩」における用語

⑭ 「欺かざるの記」後篇(下) P 三五、明治二十八年五月十二日

十二日

⑮ 同右書P 三二、同年同月十二日

⑯ 矢野龍溪氏談、全集V 8 P 二九二

⑰ 齋藤甲花著「国木田独歩と其周囲」P 二四二

⑱ 「欺かざるの記」後篇(上) P 二三、明治二十七年四月十日

日

⑲ 「奈何にして小説家となりし乎」全集V 4 P 二〇七

⑳ 「欺かざるの記」前篇(下) P 二一六、明治二十七年二月十二日

㉑ 同右書後篇(下) P 六四、明治二十六年三月十八日

㉒ 同右書前篇(上) P 六八

三

独歩は明治三十八年十月十九日綱島梁川に書簡を送って、次のように述べている。

拝啓

貴著病感録を読み得たる幸福を謝する為め敢えて此書を呈し且つ拙著独歩集一冊を座右に献じ候

独歩集中「牛肉と馬鈴薯」と題する一編は貴下に一読の榮を賜はらんことを願ふものに候小生の作物につき諸友の批評紛々たりと

雖も未だ彼の一篇につきては何人も小生の意を得たる批評を与へられしものなし蓋し心の経験の異なるが故かと存候然るに貴下の高著中驚異と宗教の一篇こそ実に小生が心靈の経験と符合するやに愚考仕り候間乍失礼御一読を煩はし度く願ふ次第に御座候也

(以下省略)

この書簡は、独歩が『牛肉と馬鈴薯』に述べようとしている事柄が、「驚異」の願いであることを、明確にしている。一篇の主題たるこの「驚異」の願いは、独歩の生涯を通じての生え抜き思想であり、それがカーライルの『英雄崇拜論』および『サルトルレザルタス』によって形成されたものであることは、先学のすでに述べているところである。(24)

『牛肉と馬鈴薯』の岡本誠夫は、最初「牛肉党に非ず、馬鈴薯党にあらず」と述べ、

「(前略)僕はこれぞといふ理想を奉ずることも出来ず、それならつて俗に和して肉慾を充たして以て我生足れりとすることも出来ないのです、出来ないのです、為らないのではないので、実をいふと何方でも可いから決めて了つたらと思ふけれど、何といふ因果か、今以て唯つた一つ不思議な願を持って居るから、其ために何方とも得決めないで居ます」

とも言っている。更に「驚異の念を以つて此宇宙に俯仰介立したいのです。その結果がビフテキ主義とならうが、馬

鈴薯主義とならうが、將た厭世の徒となつて此生命を詛はうが、決して頓着しない」とも述べている。しかしながらこれらは決して虚無や懷疑から發せられた言葉ではなく、「原因を虚偽に置きたくない」ということを強調せんがため的手段として用いられた比喩的發想にすぎず、さらに煎じ詰めれば、遊戯的前提に立ちさえしなければ——換言すれば、驚異の念をもつて宇宙に俯仰介立できさえすれば——結果は自ら展開するというのである。いづれの方向へ展開するであらうか。

岡本は言う。キリストや釈迦の様な『神の子』になりた、大宗教家になりたい、しかし不思議を痛感できずにそのなるくらいならば、自らを冷笑し、自分の顔に「偽」の一字を烙印しよう。必ずしも信仰そのものが願いではない。信仰無しには片時たりとも安心できぬほど、不思議を痛感したいのが願いである。しかるに「驚異」できずに理窟を言い、悟り顔をしている今の宗教家達はことごとく幻を見ているにすぎない。「驚異心」を母胎とせぬ宗教は遊戯たるにすぎないと、かく言っている。「驚異心」こそ信仰の母胎であった。このことはさらに『欺かざるの記』や、『岡本の手帳』『悪魔』『神の子』『天地の秘密』等の諸作にも繰り返して述べられている。

いうまでもなく、独歩の信仰は植村正久牧師によつて導かれたものである。が、独歩の宗教観は「驚異心」がその根底をなしているために、植村牧師の説くキリストの神性と十字架の贖罪を主張する正統信仰との間には、幾分のずれが見られる。そうして独歩の文学は、このずれを大きくする方向に發展していったのである。

岡本はまた次のごとく論じている。

「僕の知人に斯う言つた人があります。吾とは何ぞや (What am I?) なんていふ馬鹿な問を發して自から苦むものがあるが、到底知れないことは如何にしても知れるもんでない、と斯う言つて嘲笑を洩らした人があります。世間並からいふと其通りです。然し此問は必ずしも其答を求むるが爲めに發した問ではない。実に此天地に於ける此我てふものゝ、如何にも不思議なことを痛感して、自然に發したる心霊の叫である。此間其物が心霊の真面目なる声である。これを嘲るのは其心霊の麻痺を白状するのである…… (中略) ……」

「我何処より来り、我何処にか往く、よく言ふ言葉であるが、矢張り此問を發せざらんと欲して、欲せざるを得ない人の心から宗教の泉は流れ出るの、詩でもさうです、…… (後略) (傍点筆者)

宗教や文学の泉は「驚異心」より流出するものなのである。

「驚異心」はまた彼の自然觀察の母胎となっている。岡

本の述べるところでは、我々は毎日太陽を見、毎夜星を仰ぐ、そうしてこの不思議な天地が一向不思議でなくなる。ここに至つては、月光、星夜、花の夕の美をたたえる滔々たる詩人の文字も、感情の遊戯に過ぎない、と言う。「驚異心」を母胎とせぬ自然觀察は、幻影を見ているにすぎぬのである。このことは『落日に対す』という一文の主題ともなつてゐる。

以上で、「驚異心」は宗教・文学・自然觀察の母胎であることが明確となつた。

「驚異心」は宗教・文学の母胎であつた。しかるに第二節に述べたごとく、信仰や文学は独歩の浪漫の表出である。したがつて「驚異心」は浪漫の誘因として、因果關係において理解されねばならない。このことは「驚異」を主題とする全作品に明示されている。「病牀録」中の「芸術観」から、一節を引用してみよう。

(前略) あゝ生に対する哀痛の念今一層深く、鋭く、長く連続するならば、余は既に世を遁れ去りしならむ。曷ぞ亦塵俗の間に伍せんや。

現世に執着すべく、余は余りに脱俗せり。而も俗世を避るべく、余は只管に生の孤独を嘆ずること能はず。彼の「牛肉と馬鈴薯」に於いて、妻を姦せしめ、子を喰はしめてまでも、猶ほ求めんと

欲したる願望、即ち一切の虚偽と夢魔とを振り落し、真実衷心より宇宙人生の秘義に驚嘆せんと欲するの念は、余が一貫したる願望なり。

『牛肉と馬鈴薯』において、否、生涯一貫して追求した「驚異」の願望が達成されていたならば、現実的な生活圏から脱して、浪漫的な生活に没入することができたであろうというのである。

現実的性格の濃化とともに褪色してゆく浪漫、ややもすれば浪漫を喪失しそうになる時に、彼の詩魂に触れる事象に接して、独歩は思わず驚くのである。宇宙・人生の不思議を痛感する時、彼の浪漫は呼び醒まされる。「驚異心」こそ浪漫への覚醒剤であり、根底であった。内面においてその現実的な性格と相剋する浪漫を醒ますものこそ、天地の不思議に驚く心だったのである。

それでは次に社会的現実と戦う浪漫に対して、「驚異心」は如何なる方向に働きかけるであろうか。この結論を導くためには、「驚異心」と浪漫との間に、信仰と自然という二つの橋渡しを必要とする。

社会的現実との戦いに次々と敗北してゆく浪漫、この敗北の中に在って、独歩にはなお救いがあったのである。それは信仰であり、自然であった。自然に接し、信仰に没入

することによって、独歩は新しい希望と勇氣と確心を植えつけられるのであった。

如何なる心中の世間的煩悶も、吾が身此の悠遠宏大深玄秘密なる天地に介立するを感じる時は霧よりもろく消散するぞかし。

星斗を仰ぐ時は煩悶は消ゆ

彼が田舎をなつかしみ、北海道に憧れ、しばし旅行したのも、自然に接してその慰安に触れようとしたためであった。「信仰なる哉、信仰は知る能はず、されど唯一の慰安なり。勇氣なり。希望也。」と述べているように、信仰また救いであった。

先述せるごとく、「驚異心」は自然觀・宗教觀の母胎であった。宇宙・人生の秘義に驚く時、彼の自然觀・宗教觀に血が通う。自然を觀る目は開かれ、信仰の泉は湧出する。彼は自然と信仰との慰安に接する。理想の血は高らかに脈うち、自らを敗北へ押しやろうとする苛酷なる現実に挑戦する情熱と確心とを涵養される。「驚異心」はここでも浪漫を鼓舞する作用を果すのである。苛酷なる社会的現実に立ち向かおうとする独歩の理想と情熱を励ますものは「驚異心」であった。そうして斯様な浪漫をもってする社会的現実との戦いの中にこそ、独歩は生甲斐を見出したのである。ここにおいて宇宙・人生の秘義を痛感したいという願い自体には、積極的な意義を汲みとることができる。

「驚異心」こそ内外両面における現実と相剋する独歩の浪漫の支柱だったのである。

(注)

②② 「独歩書簡」(以下単に「書簡」とする。) 全集V8P二九九～三〇〇

②③ 「驚異」の願いがはじめて見られるのは、明治二十六年十月十三日の「欺かざるの記」であり、この後も始終繰り返されている。小説としては、『岡本の手帳』『死』『悪魔』『神の子』に、小品・雑文では、『我が願』『驚異』『天地の秘密』『落日に對す』『此の我の存在』『天地の大事実』『病牀録』の諸作に、また新体詩『驚異』に述べられている。更に書簡中にも先掲の綱島梁川宛のものをはじめとして、この願いの見られるものが多い。

②④ 寺園司氏「植村正久と国木田独歩」(国語と国文学昭和二十八年七月号第三百五十一号所収)

②⑤ この辺、同右論文による。

②⑥ 全集V8P六六

②⑦ 「欺かざるの記」後篇(下)P一七七、明治二十九年八月十六日

②⑧ 例——明治二十四年六月十八日田村三治宛書簡、V8P一二六～一二七(前略)田舎は正しく僕を打てり。田舎は全く僕を捕へたり。ア、僕は都人百人の爲めに働かんよりも、寧ろ、田舎、百人の爲めに働かん。同じく百人なり。一は悪

独歩の『牛肉と馬鈴薯』

魔に付く、一つは神に近し。語あり曰く都会は人之を造り、田舎は神の御手に成る!(以下省略)

②⑨ 独歩は北は北海道より南は九州にわたって旅行している。

銚子地方、日光、湯ヶ原等はその主な所であり、京都にも来たことがある。

③⑩ 「欺かざるの記」後篇(上)P一五八、明治二十七年八月十一日

四

重ねて言えば、『牛肉と馬鈴薯』の中心は、宇宙人生の不思議を痛感したいという願いに存する。この願いこそ独歩の思想の根源を貫くものであった。彼においては、その浪漫が現実との相剋のうちに徐々に後退してゆく中で、「驚異心」はなお現実に向かおうとする浪漫の根底をなしていた。したがって宇宙・人生の秘義を痛感したいという願い自体は、全く積極性に富んだ浪漫的意義を有するものであった。「驚異心」こそ、独歩にとっては文学の母胎でもあったわけだ。

坂本浩氏は独歩の作品に見られる火のごとき熱烈さを信子への失恋に基因させているが、単にそれだけのものではない。自然に、生死に、否、宇宙の森羅万象の不思議に戦慄する、彼の胸底を走ることのこのきこそ、また彼の文学

を生み出すエネルギーの燃焼であつたわけだ。彼の作品に熱烈火のごときものの感じられるのは、むしろ当然と言わねばならない。そうしてこれこそ独歩の文学の魅力をなしているものなのである。

しかしながら斯様な願いを強調しなければならなかつたところに、これを裏返せば、すでに理想家独歩は内外両面にまたがる現実（以下単に現実という。）との戦いの『疲労』の前にかなり追い詰められつつあつたことがわかるのである。こう言えば循環論であるが、事実独歩はすでに以前の詩人独歩ではなかつた。彼の人生観はかなり散文的、現実的なものとなつていた。詩人独歩から小説家独歩への移行は、彼が信子との恋愛に破れたところからもたらされたのである。この失恋による「魂の試煉は詩に盛るには余りに複雑すぎた」⁽³²⁾「詩から散文へ」⁽³³⁾の移行の直接の原因となつたものは、このように信子への失恋であつたけれども、なお数々の試煉によつて、彼の作家としての目が自らを敗退させてゆく社会的現実に向かつて啓けてきたためであつた。驚きたいという願いを強調しなければならなかつたのは、理想家独歩が現実の前にかなり追い詰められつつあつたがためである。

しかもどうかして理想を押しとおそうとする独歩にとつ

て、「驚異」の願いさえも容易には達せられないのである。これは彼にとつて深刻な苦悩であつた。岡本の顔に「言ふ可からざる苦痛の色」がうかがわれたというところで『牛肉と馬鈴薯』の筆を擱いているが、この含蓄ある結句には独歩の深い悩みが読みとられる。これは彼が「世間的」⁽³⁴⁾で、「習慣の圧力から脱れて」天地の間に俯仰介立てきぬためであつた。浪漫は彼の内部においてもその浮世心のために圧迫されつつあつたがゆえである。

現実内部からも外部からも彼の浪漫を圧迫しつゝあつた。「驚異」の願いさえ達せられぬとすれば、彼はいよいよ敗退の他はない。「驚異」の願いからは、かく現実の前には圧迫されてゆく作者を知覚するとともに、彼を追い詰めてゆく彼自身の内部にはらむ現実的な性格と、社会的現実の苛酷さを感じとることができる。しかしながらここにはその苛酷さを直写してはいない。単に主題を発生させた背景として、読者がこれを意識しうるにすぎない。作者の社会的現実への着目は、主題たる不思議を痛感したいという願いからは、斯様に象徴的に捉えうるにすぎないのである。

ここまで述べてきて、もう明らかなように、『牛肉と馬鈴薯』には独歩の理想と、その達成を妨げようとする自己

内面の現実的性格及び、彼をとり巻く社会的現実の苛酷さとが、同時に形象化されている。浪漫と現実といういわば相反する要素が、作品の世界において一つの調和を得ていること——ここにこの作品の絶対的価値が存するのである。

広橋一男氏の言うように、独歩のロマンティズムには確かに「論理よりも直感を尊重し、神秘主義的なものであり、都会の文化よりも田園を尊重し、原始主義的なものであ」る一面が存していることは事実である。そしてそれが「幾多の過誤をふくむもの」であることも、認めねばなるまい。しかしながら斯様な後向きなロマンティズムを以て、独歩の浪漫のすべてであると論ずることは、当を得た批判とは言えまい。浪漫主義はもとより自我解放の精神の発揚として萌芽したのであり、独歩の浪漫が建設的・積極的なことは、すでに述べてきたところである。「驚異」の願いについても、その抵抗の支えとしての進歩的意義を無視して、単に反科学的という理由から「人間から自信と誇りをうばい、絶対者への帰依と随順を人民に要求する支配階級のかくされた意図を強めるのに役立つものである」⁽³⁷⁾ときめつけるがごときは、その批判精神は壮とするに足るも、いまだ承服はしかなるのである。このことはキリスト教の時代に果した指導性の進歩的役割——特にそれが反戦思想の一中心をなしたこと——を考えてみても明瞭である。

無から有は生じないのであって、独歩のロマンティズムが進歩的意義を有するものであったればこそ、そのリアリズムもまた進歩的たり得たのである。したがって私は独歩の浪漫が「批判の対象の進行を許す」「厳密な意味においては、当時においてさえも反動的な」「歴史の流れに逆行するところのものであった」⁽³⁸⁾とは、どうしても考えることができない。ましてその賞讃の「帷の蔭に屠殺者の斧がかくされて」⁽³⁹⁾おり、ファッショニズムにつながる危険性があるとは、いさゝかも思われないのである。少くともそれは、時代の反動化を喰い止める歯車の役は果たしたであろうし、さらに積極的な人間解放の精神に寄与したものと思う。

(注)

- ① 坂本浩氏著「国木田独歩」P 一一七
- ② 同右書 P 一三三
- ③ 杉山平助氏著「文芸五十年史」P 二六二参照
- ④ 「岡本の手帳」全集 V 2 P 三五七
- ⑤ 「国木田独歩」(学燈社版現代文学総説 VI) P 一八九
- ⑥ 同右書 P 一七七
- ⑦ 同 P 一七〇
- ⑧ 同 P 一七七
- ⑨ 同 P 一九一